

## パイプオルガンについて

日本では「オルガン」と言えば、ふつう足踏み式のリードオルガンを指しますが、ヨーロッパでは（パイプオルガン）を指します。

パイプオルガンのパイプは、それぞれが1つの音だけを出す笛のようになっており、奏者が鍵盤を押すと、特定のパイプに空気が送り込まれて音が出ます。

音の高さは（パイプの長さ）によって決まります。

また音色はパイプの（材質）や（構造）によって決まります。

そこで、色々な高さの音や多彩な音色を得るために、パイプの本数がしだいに多くなり、それに伴って鍵盤の段数が増えたり、足で弾く鍵盤が付けられたりしました。

（バロック）時代はパイプの数が2000本程度でしたが、現在は（1万）本以上ものパイプを持つものまであります。

鍵盤の横には「ストップ」と呼ばれる装置があります。これを操作して鳴らすパイプを選ぶことにより、音色を変化させることができます。

現在はコンサートホールでも目にすることができますが、もともとはキリスト教の教会で（礼拝）に用いられる楽器として古くから発達してきました。